

研究動向

進化経済学の最先端

—Fourth International Workshop on Institutional Economics Organised by
Geoffrey M. Hodgson に出席して—

小 野 進

目 次

- 1 経 過
- 2 Workshop Programme : “How Do Institutions Evolve ?”
- 3 進化経済学の基礎概念—— routine ——
 - (1) 経済学は生物学に大きな影響を与えたのに物理学からは方法論を借りた
 - (2) meme という用語 : 儒教との関係
 - (3) 進化経済学の復活
 - (4) 経済進化とは何か
 - (5) Routine とは何か
- 4 感想と教訓
 - (1) 何故日本で経済学の新パラダイムが出ないのか
 - (2) 「神」と「天」の思想なしに絶対的真理は探究できない
 - (3) 学問上の伝統の重視 : 反面教師から学ぶ
 - (4) アメリカとヨーロッパの経済学をもっとバランスよく摂取すべきである

1 経 過

Geoffrey Hodgson (Research Professor, University of Hertfordshire Business School, UK. Formerly Reader in Economics at the University of Cambridge) から第 4 回 International Workshop on Institutional Economics の案内が来たのは昨年(2001)の第 3 回と同じ 2 月 7 日であった。

E-mail には、次のように書かれていた。

This residential workshop will be held in Offley Place, Great Offley, Hertfordshire, UK.

3-5 July 2002.

This workshop is designed to provide in-depth discussion of cutting-edge issue in institutional economics, in a forum that permits the attention to detail and definition that is often lacking in larger, conference-style events.

Great Offley is a beautiful Hertfordshire village. It is a 4-mile taxi ride from London Luton Airport and a 3-mile taxi ride from Hitchin railway station with regular trains from London Kings Cross. There are regular bus services connecting London Luton Airport with London Heathrow and London Stansted Airport.

昨年の第3回 Workshop は、call for papers にもとずいて主に報告が行われたが、今回は、seminar 形式で招待された speaker がそれぞれ報告した。

また、次の5冊の bibliography が挙げられていた。

- (1) Aunger, Robert (ed.) (2000) *Darwinizing Culture : The Status of Memetics as a Science* (Oxford and New York : Oxford University Press)
- (2) Hodgson, Geoffrey M. (1993) *Economics and Evolution : Bringing Life back into Economics* (Cambridge, UK and Ann Arbor, MI : Polity Press and University of Michigan Press)
- (3) Lauret, John and Nightingale, John (eds) (2001) *Darwinism and Evolutionary Economics* (Cheltenham : Edward Elgar)
- (4) Nelson, Richard R. and Winter, Sidney G. (1982) *An Evolutionary Theory of Economic Change* (Cambridge, MA : Harvard University Press)
- (5) Vornen, Jack J. (1995) *Economic Evolution : An Enquiry into the Foundations of New Institutional Economics* (London : Routledge)

2 Workshop Programme : “How Do Institutions Evolve ?”

Wednesday 3 July 2002

14.30 Registration

15.30 Opening and Welcome

16.00 Seminar 1 : Geoff Hodgson (University of Hertfordshire) “Darwinism in Economics : From Analogy to Ontology”

18.00 End of session

Thursday 4 July 2002

09.00 Seminar 2 : Robert Aunger (University of Cambridge) “Taking Memes Seriously”

10.30 Coffee

11.00 Seminar 3 : Geoff Hodgson (University of Hertfordshire) “The Mystery of the Routine : The Darwinian Destiny of An Evolutionary Theory of Economic Change”

13.00 Lunch

14.00 Seminar 4 : Thorbjørn Knudsen (University of Southern Denmark) “Evolutionary Explanations in the Social Development or Population Change”

15.30 Tea

16.00 Seminar 5 : Jack Vornen (Erasmus University) “Co-evolution : How do Different Types of Evolutionary Process Interact ?”

17.30 End of session

Friday 5 July 2002

09.00 Seminar 6 : Markus Becker (University of Southern Denmark) and Nathalie Lazaric (CNRS, Nice) “Defining Routines”

10.30 Coffee

11.00 Round Table Session. Discussion with Robert Aunger, Markus Becker, Geoff Hodgson, David Hull, Thorbjørn Knudsen and Nathalie Lazaric”

13.00 Lunch

End of Workshop

なお、1 経過 で挙げた 5 冊の A Short Bibliography に Godfrey-Smith, Peter (2000) ‘The Replicator in Retrospect’, *Biology and Philosophy*, 15, pp. 403-23 が付け加えられていた。

3 進化経済学の基礎概念—— routine ——

(1) 経済学は生物学に大きな影響を与えたのに物理学からは方法論を借りた¹⁾

Adam Smith が経済学の父であったとすれば、Bernard Mandeville は経済学の god-father であった。社会機構の内的連関を表現するために分業 (division of labour) を発見したのは、Mandeville であった。彼は徹底した性悪説に立って、公益 (public virtues) は個人の悪徳 (private vices) から生みだされるという道徳を導いた。

Mandeville はオランダ人の医者で、ロンドンに定住していたが、彼が英語で書いた『蜂の寓話』(1714年)において、悪徳あるいは貪欲 (greed) の追求が、経済の需要を促進、繁栄を導く、Hobbesian Problem の社会秩序の解決には、開明君主の権威によるのではなく、分権化された個人交換の相互作用であるとした。

F. Hayek は、多くの点において、Charles Darwin の理論は Mandeville からの到達点であると結論づけている。

フランス重農主義者 François Quesnay『経済表』(1758年)は、人間の血液循環の考察の inspiration から導出したもので、生物学と経済学との間の関係の例である。

Mandeville, David Hume, Smith は、理論生物学における Darwin 革命の誘発を助けた。彼等の metaphors は、経済を天体の一種の小宇宙とみなし、Newton 物理学の法則に似た経済システムの invisible hand による需要・供給をバランスさせる力の運動法則を探求し、進化システムよりむしろ均衡あるいは定常状態を想定した。

Darwin は、1838年、彼がまさに理論的 breakthrough しようとする時、Smith の『道徳感情論』(1759年)を含む多くの作品と R. Malthus の人口論を読んだ。マルサスの人口論は生存競争の一般的 vision を提供し、Darwin に natural selection のための要因を証明することを可能にした。Darwin は、複雑な現象は、多くの個人の chaotic な意図されない結果として生じるという idea を Mandeville と Scottish School から学んだ。

Darwin の natural selection 理論は、人間性格の事前的差異は、進化の必然的結果であるとし、広い意味で、人間は生れつき能力は類似していると想定している Smith や Hume と対照的な見解を提示した。

Smith では、人々の skill の差異は分業が原因であるというよりむしろその結果である。彼にあっては、The extant of the market が subdivision の推進力である。よく知られているように、

市場の範囲が分業を規定し、分業が生産力を増進さす。Smith によれば、分業は、人々が何かをするために必要な学習量を最大にする故に生産力を向上さす。しかし、分業は、むしろ、学習量を最小にするため生産性を向上させるのではないか。

Darwin 理論は、部分的に、古典派経済学やマルサスの自然神学の知識から得た独創的ひらめきが生物学に転用されたもので、プラグマティズムの²⁾パース論理学の用語を使用すれば、abduction の典型である。

新古典派経済学も、自然科学と同じように、精度の高い科学的根拠を与えるため、物理学、特に古典力学からその方法論を取り入れたことはよく知られている。

J. M. Keynes は、経済学は本質的に道徳科学 (moral science) であって、自然科学でないという。道徳科学の道徳とは人間性のことで、自然科学と違う人間性独自の領域があることを意味する。³⁾彼は、経済学は論理学の一部門であり、その方法論は内省 (introspection) と価値判断 (judgment of value) であり、経済学を似而非なる自然科学に変えることに反対している。経済学は positive argument と normative argument の区別を前提として、倫理の侍女および実践の召使として価値がある。⁴⁾

近代経済学のパラダイムを作った一人、新古典派経済学の A. Marshall は、経済学者の Mecca は経済動学より経済生物学 (economic biology) に存するといい、生物学の概念は、均衡のような mechanics の概念よりもっと複雑であると言っている。Marshall が経済生物学の構築に成功したかどうかは別問題であるが。

J. M. Keynes は、Darwin の進化論には高い評価を与えているが、彼の経済学から natural selection の概念を追放した。

私は進化経済学 (evolutionary economics) より制度派経済学 (institutional economics) の方に関心があった。それ故、進化経済学の勉強を殆どしていない。今回の Workshop には進化経済学の最先端を学ぶつもりで出席した。⁵⁾

私が進めつつある The Economics of Quasi-Markets の構築という観点から、進化経済学のどの部分が役に立つのか、ということに非常に興味があった。何故なら、Lawrence E. Harrison [1985] によれば、経済発展は文化 (①信頼の範囲、②倫理体系の厳格さ、③権限行使の方法、④社会の姿勢) に依存する。そのような文化は、人々のどのような遺伝子に支えられ、如何にして反復・継承されているのか。東北アジアの Post-Confucianism の文化圏の人々はどのような routine に支えられ、どのように複製 replicate されているのか。

(2) Meme という用語：儒教との関係

今回の Workshop における主題の一つは Robert Aunger の “Taking memes seriously” であったが、私は、まず、報告テーマにある meme の意味、また、Hodgson からまえもって伝えられた Bibliography にある Aunger の Memetics がどういう discipline なのか分からなかった。この二つの用語は、私の使用している研究社の『新英和大辞典』（昭和35年）にも、The Random House Dictionary of the English Language The Unabridged Edition (1970) にも出ていなかった。私の手持ちの英和辞典や英英辞典は相当古いので、学校の新しい辞書を調べたが載っていなかった。そこで、立命館大学 BKC の図書館の情報サービス課で meme と memetics の名称が出

ている文献を調べてもらった。人材派遣会社から来ている係の人は学内外の文献を詳細に調べ30冊ほどの関連文献と R. Aunger, ed. *Darwinizing Culture* への批判論文 Dan Sperber, *An objection to the memetic approach to culture* (Aunger は Sperber 論文にしばしば言及していた) を print-out して添付してくれていた。其の結果, meme は, 進化心理学, 人間行動生態学, 進化研究と社会の domain で使用されている概念であることが分かった。

ミーム (meme) は, 遺伝子 gene とギリシャ語 mimeme を合成した Richard Dawkins, “The Selfish Gene”, 1976 (邦訳『利己的な遺伝子』紀伊国屋書店, 増補改題『生物＝生存機械論』) の新概念である。ミーム概念により外国では情報伝達研究や人口知能研究などミーム研究 (memetics) が盛んに行われているようである。⁶⁾

私は最も速く洋書を入手できるのはアマゾンの internet で購入する事だと思い, 早速アマゾンに Aunger 編集の *Darwinizing Culture* を注文した。1 週間ほどで宅配してくれた。しかし, Aunger の本を見て, ダーウインの『種の起源』とドーキンスの『利己的な遺伝子』を読まなければ話にならないと思った。

今西錦司責任編集『ダーウイン』中央公論社と八杉竜一訳『種の起源』岩波文庫を買った。今西錦司の「ダーウインと進化論」の解説は面白かった。ダーウインは, たまたま読んだマルサス『人口論』(1798年)における人口の幾何級数的増加に対する食料の算術級数的増加という生物界の一般法則から人間といえども逃れることは出来ないと云う説から彼の自然淘汰の考え方の形を整えることが出来た。ダーウインにとって, 一般生物界にとって, 生まれた物を全部生かすだけの余裕が, 自然には作られていないということである。それ故, 当然, 生きる物と, 途中で死ぬものが出来るのである。人為淘汰はいろいろの変異の中から, 人間の気に入ったものを選んで, 気に入らない物を捨てる。自然淘汰では変異の中から, 環境に適したものが生き残り, 適応出来ないものが死ぬ。

Wassily Leontief (ノーベル経済学賞受賞) は, 経済学が自然科学に影響を与えた例として, 古典派経済学者がダーウインの進化論に関する先駆的研究に弾みをつけるほど強力な概念装置を作ったといっている。昨年の第3回 International Workshop on Institutional Economics における私の報告 *The Economics of Quasi- Markets* で Leontieff のこの一文を引用したが, Tony Lawson (University of Cambridge) の *Lecture, Economics as social theory* でも偶然 Leontieff の同じ箇所を引用していた。

EUNIP (European Network on Industrial Policy) から 6th Annual EUNIP conference (Abo Akademi University, Turku, Finland. 5-7 December, 2002) への call for papers が E-mail できていた。6 月 1 日までに提出論文の abstract を送れと云うことだった。EUNIP の Organizing and Reviewing Committee が abstract を審査し合格すれば, 8 月 1 日まで完成論文を提出の事であった。EUNIP はヨーロッパの各大学・研究機関・政策当局者によって構成されている。私は, この準備にも取りかかった。このため, 『種の起源』(1859年)と『人類の起源』(1871年)を読むことができず, 辛うじて, 『利己的遺伝子』の第11章 ミーム 新登場の自己複製子 を読んだ程度である。

「熱烈なダーウイン主義者」と自称するドーキンス [1993] によってミーム概念を整理しておこう。

ある種の進化を生じるという点で、文化伝達は遺伝子伝達と類似している。ジェフリー・チョーサーは、現代英国人と結びつきを持っているが、チョーサーと現代英国人との間で会話をかわすことは不可能である。言語は、非遺伝子的手段で進化し、遺伝子の進化により各段に速い。

科学的進化と自然淘汰による遺伝的進化の類似性に関して、カール・ポPPER卿等が説明を加えている。

遺伝子の特性は自己複製子である。

文化伝達の単位、あるいは模倣の単位を伝達する概念遺伝子 DNA 分子と異なる別種の自己複製子がミームである。

DNA は唯一の自己複製子でない。

ミームの特性は、①寿命 ②多産性 ③複製の正確さ の三つである。ドーキンスの頭の中にある「ほたるの光」のメロディは彼の余命の間しか生き永えられない（①寿命の例）。科学的 idea は、科学的集団の中にどの程度受け入れられるかどうかに依存する。科学者の idea が科学雑誌に多く引用され増殖すると、それは②の多産性の例である。自己複製子が成功するための③複製の正確さは、やや頼りない。すべての生物学者がチャールズ・ダーウィンの理論を正確に彼の頭の中に刻みつけている訳でない。

人間が死後に残せるのは、遺伝子とミームである。人間は遺伝子を伝えるために作られた遺伝子機械である。われわれの遺伝子自体は不死身であるが、特定の個人の遺伝子は、世代が一つ進むごとに遺伝子の寄与に半減し、その寄与率は遠からず無視しうる値になってしまう。ソクラテスの遺伝子のうち、今日の世界に残っているものはたして1つか2つかどうかわからない。しかし、ソクラテス、ダーウィン、コペルニクス、マルユーニのミーム複合体は健在である。

好著である加地伸行 [1994]『沈黙の宗教——儒教』筑摩書房は、儒教の死生観と現代生物学の重要な概念である「利己的遺伝子」の考え方と似ており、両者に通底するものがあるといっている。何故そうなのか。儒教でいう祖先崇拜とは、祖先の存在の確認である。もし、祖先が無ければ現在の自己は存在しない。祖先があると意識することは、祖先から自分に至るまで、確実に生命が連続してきたという確信である。そして、自分という個体は死によって消滅するけれど、もし、子孫ありせば、自分の生命——自己の遺伝子——は存在し続け可能性がある。

ドーキンスは、個体には死があるので、生殖によってコピーを作り、次の肉体を残し、そこに乗り移る、それは自己の複製 replicator を次々作っていくことであり、それを最大目的にしているから、其の行動には利己的なところがあるのは当然であるという。

「孝」とは「生命の連続の自覚」である。子は親の肉体のコピーであるとするドーキンスの説と儒教は通底する。遊魂（自分の死後浮遊している魂）と子孫（個体は消滅しても、己の遺伝子は子孫の肉体に宿る）は存続する。このことは、己の精神と肉体は永遠に楽しいこの世に現在として存続しつづける可能性があることを意味し、この自覚を説くのが儒教であり、孝の本質である（p. 63-69）。

私は加地氏のこの本のこの箇所を読んだ時、ドーキンスの『利己的な遺伝子』を読まなければならないと思っていたが、いずれ『儒教倫理と資本主義の精神』の本を書く時に読もうと思い、今まで読まずに来た。

2002年の5月末、EUNIP conference の Chairman Professor Johan Willner に 'A Quasi Mar-

ket Economy and the Global Competition : Industrial Policy in Northeast Asian Countries' というタイトルの abstract を送った。彼から早速受け取ったという返事が来た。

その後、しばらくすると、技術上の理由で 6 月 19 日まで abstract の提出期限を一般的に延期するという E-mail が彼の secretary から来た。先に提出した abstract は、英語を correction してもらう時間がなかった。イギリス人の親しい友人（Oxford 大学 PPE 出身）に英文の abstract を check してもらい revised abstract を 19 日ぎりぎりに添付ファイルで送った。その翌日、Prof. Willner から、近い内に accept するかどうか返事すると云って来た。

然し、返事が来ないうちに、6 月 28 日 Great Offrey の IWIE に出席するためパリ経由でロンドンに向けて出発して、7 月 15 日帰国した。E-mail を開いたが、Finland から返事が来ていなかった。Organising and Reviewing Committee で reject されたのかなと思っていたら、7 月 18 日、Prof. Willner から、'It is my pleasure to inform that your paper has been accepted for the EUNIP conference in Turku, 5- 7 December, 2002' という E-mail が来た。

ちなみに、昨年の 5th Annual EUNIP conference は、Vienna, Austria, November 29th-December 1st, 2001 で、百数十名が参加した由であった。

会場でもあり私共参加者が宿泊した Offrey Place はイギリスの countryside に常に見られる美しい village のなかにあった。

Hodgson 教授が、Workshop 終了数日後、E-mail の添付ファイルでこの Offrey Place の全景写真を送ってきていた。

Workshop 参加者は、participants の list をもらったが、36 名で、イングランド以外に、アメリカ、イタリア、メキシコ、アイルランド、オランダ、ロシア、フランス、ドイツ、スウェーデン、イスラエル、シンガポール、スペイン、日本から来ていた。日本人は私だけであった。

Offrey Place に参加者のうち何人ぐらい宿泊したのか不明であるが、私ども夫婦が泊まった部屋は二階で快適な申し分のない部屋であった。

Offrey Place は、17 世紀に建てられたもので、現在は Hertfordshire 州の所有になって宿泊を始め各種催しに使用されている。Offrey Place の周りはクリケット場やテニスコートで整備された緑地帯で満ちあふれ、そのまた向こうは雑木林で覆われていた。

日本ではこのような環境は元々無かったのか、あったとすれば、戦後の成長過程で潰してしまったのではないと思う。日本の都市の生活空間が、無秩序、猥雑であることはよく知られているが、農村地帯も義理に美しいとはいえない。都市の設計思想が見られないし、都市計画は無思想の役人の作文で具体性に欠けるし、50 - 60 年も掛けて着実に強力に実行していく政・官・民の知行合一がないからである。また、日常生活における美しい環境維持に不公平を理由に膨大なカネを掛けることに国民も支持しないからである。良好な環境維持には膨大なコストを負担する覚悟が国民に必要である。

中産階級の中層・上層の人々が住むと思われるパリの住宅地で、街灯は殺風景な裸の蛍光灯でなく、統一されたなかにも各家庭が独自の洗練された街灯をつけていた。

強力な都市生活空間の環境維持の思想が国民にあれば、それに支出するカネをいとわないはずだ。一人当たり GDP がイギリス、フランス、イタリアなどより大きくても花より団子なのである。特に日本ではいわゆる「市民」参加型の都市設計では便利な安っぽい街はできても、西欧の

パリ、ロンドン、フローレンス、マドリッドのような、威厳に満ちた風格のある思想のある街は出来ない。戦後「民主主義」のせいだと思うが、風格ある日本人も戦後はすくなくなった。最近建てている日本を代表する国立大学の建物を見ていれば、如何にも安っぽい民間のマンションのようで、機能的にもあまりにもお粗末でないのか。なぜ、日本を代表するに相応しい威風堂堂たるものを作らないのか、文部科学省の役人の神経を疑いたくなる。多分子算が限られていて国立大学の建築基準でこうなっている、という事無かれ主義のいい訳をするであろう。

西欧と日本の都市・農村の meme 文化遺伝子があまりにも異なるからであろうか。

(3) 進化経済学の復活

Darwinism は、世界の広範囲な学問・知識共同体において、知識人や学者が議論を行うさいの知的 framework であり、近代思想の正統派になりつつある⁷⁾。

20世紀前半は物理学（とくに量子物理学）の時代、後半は生物学（とくに分子生物学）の時代といわれている。

自然における進化（evolution）の思想は、近代的な意味で、何と云っても、Jean Baptiste de Lamarck と Charles Darwin から来ている。

大抵の生物学者は今日 Lamarck の進化論を否定する。

Darwin の進化論に対抗して打ち出された今西錦司は自己の進化論と Lamark のそれとは類似している⁸⁾と言っている。

経済学における進化思想は1980年代に復活した。特に、今日の進化経済学（Evolutionary Economics）は、Richard Nelson and Sidney Winter [1982] *An Evolutionary Theory of Economic Change*, Harvard University Press. に由来する。

しかし、Winter [1991] は 'Evolutionary Economics relates to Armen Alchian's classic paper', 'Uncertainty, Evolution and Economic Theory', in much the same way that transaction cost economics relates to Coase and 'The Nature of the Firm' (quoted in Vromen [1995] p. 65) といっている。それ故、進化経済学の原型は、1950年の上記の Alchian 論文である、と解釈するのが、Vromen [1995] である。

Hodgson は、しかしながら、Nelson and Winter の業績を指して、次のようにいっている。

「これは稀に見る業績であることが強調されなければならない。若干の以前の著者（Armen Alchian や Milton Friedman を含む）は Darwin の idea のある部分を経済学に適用したが、Nelson と Winter の業績はその範囲適用において先例がない。その主要な先行者は、Thorstein Veblen の進化経済学である。彼は variety, inheritance, そして selection の Darwin の原理を経済現象にまた適用した。広い意味で真に進化経済学の資格があるにもかかわらず、Marx や Shumpeter を含む他の人々は、Darwin の機軸原理を経済学に適用しなかった。」（*The Mystery of the Routine : The Darwinian Destiny of An Evolutionary Theory of Economic Change*）。

Nelson and Winter [1982] や Metcalfe [1998] は進化現象を説明するため Lamarckian のメカニズムを自明のものとする傾向がある。

Nelson and Winter [1982] は、「我々の理論は厚かましくも（unabashedly）Lamarckian である。それは、獲得形質の遺伝（inheritance of acquired characteristics）と逆境の下での変種の出現を注視する」（p. 11）と言っている。

Geoffrey Hodgson と Thorbjorn Kundesman など社会・文化の進化 (social and cultural evolution) において Darwinian より Lamarckian の獲得形質の着想は有益であると見なしている。

Nelson と Winter は、正統派企業理論を批判して、正統派経済学に変わる代替理論を提供した、と一般に考えられている。

然し、Hodgson とは異なり、Vromen [1995] は、‘I shall argue that Nelson and Winter’s evolutionary theory is better viewed as an explication and extension of the basic belief of ‘orthodox theorists such as Alchian and Friedman’ (p. 66), The theoretical foundation of Nelson and Winter’s own evolutionary theory are consonant with what Nelson and Winter call ‘orthodox appreciative theory’ (p. 66) と述べて、4 Modeling the Selection Argument Nelson and Winter’s evolutionary theory の 3 Selection as a Real Generative Mechanism で Winter は追加的メカニズムとして企業の行動である routine を導入したとして Hodgson 達と異なった見解を示している。

Alchian は、Lester と Machlup の企業理論の立場は誤りと見なす。何故なら、彼等では新古典派理論の計算 (deliberations) が⁹⁾、企業の意志決定を導くという仮定、単一企業の行動を仮定しを共有しているからである。

Alchian 企業理論は、非市場力、受動的な適応、積極的適応のようなことが、中心になるという進化タイプの分析によって、限界分析に取って代わる。

その後、この natural selection の思想は、利潤最大化の新古典派仮説を支持するため、Milton Friedman によって受け継がれた。Oliver Williamson が、生き残り (survival) は効率 (efficiency) を意味する、という彼の観念を支持するため競争的自然淘汰の思想を訴えた (Hodgson [1996] p. 27)。

(4) 経済進化とは何か

Herbert Spencer (1820—1903) は、当時、Alfred Marshall より名声があった人であった。彼は政府の市場介入や平等主義反対の体制弁護論的な目的で進化論を取り込んだ社会ダウイン主義者として知られている。彼は、多くの社会改革や増大する規制資本主義と関連する国家権力の集中の成長に恐れを持ち、laissez-faire の擁護者となった。彼の適者生存 (survival of the fittest) の思想は、ビクトリア時代の laissez-faire の原則によって形成された。

Darwin が自然淘汰の概念を使用しているのは、彼の友人 Wallace により『種の起源』の機軸概念における「自然淘汰」よりむしろ Spencer の適者生存を使用するように説得されたからである。

Spencer は、laissez-faire を正当化するため生物学的進化に訴えた。しかし、生物学の進化思想は、laissez-faire の哲学を支持する事ではない。

Nelson と Winter の進化理論は、正統派に代替する理論を叙述することであるが、彼等の経済的な自然淘汰 (economic natural selection) の基本思想は生物学から借りたと明言している。

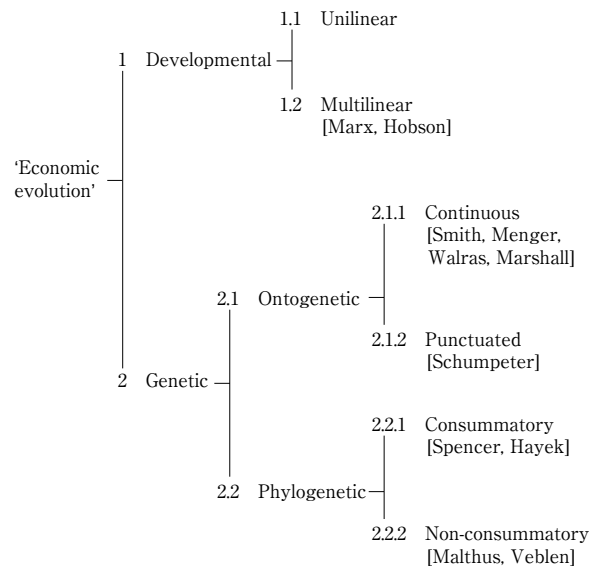
経済進化 (economic evolution) の定義についてまだ定説がないようである。

Hodgson [1996] によれば、Lamarck と Darwin のよう偉大な進化の理論家は evolution という用語を避けた、と (p. 37)。

19世紀にこの evolution という概念を普及させたのは、Darwin でなくて、Herbert Spencer (1820-1903) であった。Darwin は、“The Origin of Species” の第6版で初めてこの用語を使用し、その後もそれを控えめに使用した (Hodgson [1996], pp. 37-38)。

Hodgson は、3-4の表のような、economic evolution の意味の分類学 (taxonomy) を提示している。

表 3-4 経済進化の意味の分類学



進化過程は新古典派のいう「最適な結果」を必ずしも導くものでない。経済生活における産業政策 (Industrial Policy) やフランスやオランダのような指示的計画 (Indicative Planning) のように限定された形態の可能性や望ましさは、近代進化理論によって注視される (Hodgson [1996] p. 198)。進化経済学の現代の再建者 Richard Nelson は次のように述べて、アメリカにおける産業政策の ‘picking winners’ を否定している。「政府の R & D に対する支援に関する議論の多くは、政府は勝者を入念に選ぶ試みをすべきか、という問題について巻き起こっていることは残念 (shame) なことである。我々の case studies からの経験は、この問題について否定的な答えをだしている」 (Nelson [1982] p. 470)。

(5) Routine とは何か

ルール rules を支えているものは何であり、それに時間を通じてある持続性をあたえるものは何か。ルールを行動に転形するものは何か。

ルールは、画一主義、服従、模倣によって再生される。ルールは社会経済進化においては明らかに複製の対象であるけれど、人間はルールだけによって動かされるのではない。そのようなルールを生物学上、社会学上根拠づけているのが routine でないか。

Nelson and Winter によれば、routine は、雇用と解雇のための手続き、新しい在庫の注文、需要の大きい製品の生産増強のような生産のための高度に特殊化された技術的手順から、投資、

R & D, 広告, 企業戦略, 海外投資など企業の諸特徴を含めた用語である。彼等は routine を, 企業の組織的記憶 (organizational memory of the firm) と社会経済の領域における遺伝子 gene の同等物 equivalent であると定義する。彼等は企業における routine を情報の貯蔵所と見なしている。彼等は, routine behaviour と deliberate choice を比較する。Routine behaviour は, quasi-automatically or mechanically として示されるのに対して, 新古典派の deliberate choice は意識的な意志作用および熟慮を意味する。

それでは, routine とは何か。routine は, 何故持続するのか。これは Hodgson の理解である。

Routine はグループあるいは組織に関係し, これに対して, 習慣 habits は個人に関係する。それ故, routine を習慣の組織的類似物とみなすことが出来る。Routine は, 習慣自体以上の存在論的な階層 layer である。

Hodgson は, Darwin の観点と哲学的観点から, Nelson と Winter の行動 behaviour としての routine の定義は批判する。上述のように, routine は habits が個人に関係するように, 組織に関係する。Hodgson は habits のように routine は行動よりむしろ性向 (propensities) であると考ええる。

Routine は, 遺伝子のように, 情報を持続可能にし, 時間を通じて継承され, 企業の適性 (the fitness) の決定において key element であり, 競争的淘汰 (competitive selection) の過程における生存する能力である。

Routine は行動ではない。それらは行動の capacities と capabilities の中に蓄積される。これらの能力は知識と記憶を含む。これらの能力は, 何らかの事情による引き金によって, その後の行動を導く組織的構造や個人の習慣を含む。ある会社が午前 9 時から午後 5 時までが就業時間とすれば, 就業時間中, 多くの組織的 routines が動員される。午後 5 時以後は inactive になる。しかし, routines はまったく消滅しない。翌日の午前 9 時になると適当な刺激により又不思議なことに routines が再現する。これは routine as truce として解釈することもできよう。したがって, routine は遺伝子型 genotypes のようなものとして理解されうる。それは dispositions か capabilities のいずれかである。しかし, 一つの routine が十分に成文化されていることを意味しない。Routines は必ずしも名目上のものでもないし, 成文化されるか, 公式的に承認された手続でもない。Routine は一般的に informal で暗黙の知識に依存している。

習慣は個人から個人に再生され, routines はグループからグループへあるいは, 組織から組織へ再生される。技術普及, 組織研究, 企業戦略の研究において, Routines の複製あるいは再生, 普及についての研究が見られる。これらの研究の中心になっているものは, practices や組織的関係の replications である。

Hodgson は, 遺伝子, meme, 習慣, routine を比較して表 3-5 にまとめているので挙げておこう。

Routine は, 生産ラインにおける低レベルの活動に限定されるのではなく, 企業の戦略レベルにおいて見つけられることを強調する (Markus C. Becker and Nathalie Lazaric, Roads to explaining the recurrence of organizational routines)。

Nelson は, routines はその形成において埋め込まれた暗黙の契約によって, 組織の成員の間にある種の休戦 (truce) を生みだしていることによって, 安定的であるといっている。Routine

表 3-5 遺伝子・meme・習慣・routine の関係

	Definition	Substrate	Genotype	Phenotype	Replication Mechanism	Replicative Similarity
Gene	Unit of inheritance in a chromosome, which may influence a particular inherited characteristic	DNA	DNA coding	Organism, behaviour	DNA replication, operating directly and at the genotypic level only	Exists essentially at the genotypic level of DNA, but also gives rise to some similarity at the phenotypic level.
Meme (Dawkins, Dennett, <i>et al</i>)	Unit of cultural information acquired through the imitation of others	Multiple possible substrates	Unclear: information, instructions or behaviours?	Behaviours, culture	Not always clear; but typically involving imitation in some direct sense	Memetics has tangled references to similarities of ideas, instructions, behaviours and other outcomes. The genotype-phenotype distinction is often unelaborated or ignored.
Meme (Aunger)	A configuration in one node of a neuronal network that is able to induce the replication of its state in other nodes	Neurons	Neuron states	Interpersonal signals	Intermediary signals that copy genotypic configurations of neurons in one brain to those in another	Exists essentially at the genotypic level of the neural configuration. May or may not give rise to some similarity at the phenotypic level as well.
Habit	Individual dispositions to engage in previously adopted or acquired behaviour, triggered by specific stimuli	Human psychoneural system	A set of psychoneural connections and triggers	Individual human thoughts or behaviours	Indirectly through behavioural (phenotypic) expressions, which are then followed by incentive or imitation.	Essential similarity exists at the phenotypic level. Some other similarity may or may not also exist.
Routine	Organisational dispositions to energise conditional patterns of behaviour within an organised group of individuals, involving sequential responses to cues.	Habituated and socially structured individuals	A set of rule-like instructions or responses held in an organisation	Sequences of habituated individual behaviours in organisations	Indirectly through their behavioural (phenotypic) expressions. Other organisations can create similar behavioural patterns that become embodied in individual habits.	Essential similarity exists at the phenotypic level. Some other similarity may or may not also exist.

が変化する時とはどのような場合なのか。それは、階層構造の内部で、成員の役割を新しく見直す時、成員をこれまで導いてきた社会的位置に於ける変動がある場合である。この変化は階層的命令の回りくどいやり方によるかあるいは時々ゲームの新しいルールに従うことへの明白な拒否によって避けられる。

4 感想と教訓

(1) 何故日本で経済学の新パラダイムが出ないのか

先進国の学問の内生的な発展は、(1)パラダイムの発生 (2)支持集団の形成 (3)教科書化・經典化 (4)制度化・講壇化の順序で行われる。

Richard Nelson and Sidney Winter's Evolutionary Theory of Economic Change (1982) is a rare and historic achievement. One of the reasons for its importance is its deployment of the three core Darwinian principles of **variety, inheritance and selection**. However, Nelson and

Winter are reluctant to admit to more than the use of a biological analogy (Hodgson, Seminar 3, 太字は小野がつける)。

Nelson and Winter によって、Evolutionary Economics のパラダイムが作られた。(1)のパラダイムの発生である。(2)の支持集団としての European Association of Evolutionary Political Economy が欧州で結成された (1989年)。

然し、EAEPE は、Geoffrey Hodgson (1988), Economics and Institution: A Manifesto for a Modern Institutional Economics (八木紀一郎他訳『現代制度派経済学宣言』名古屋大学出版会, 1997年) の制度派経済学の paradigm かもしれない。いずれにしろ、(3)の教科書化は未だ無い¹⁰⁾。University of Hertfordshire において、ヨーロッパではじめて7年ほど前に制度派経済学の修士課程が出来たし、Institutional Economics で PhD をとるため Hodgson の指導を受けているブラジルから来た人もいる。(4)の制度化がヨーロッパの大学で始まったということになろう。

然し、学問後進国では先進国と違ったコースをたどる。明治日本の近代科学の導入はこのようなものであった。中国は、目下、典型的な学問後進国のこの移植コースをたどっている。

- (1) 政府の手による制度化・講壇化
- (2) パラダイムの移植・教科書化
- (3) 支持集団の養成

日本では、進化経済学及び制度派経済学の(2)パラダイムの移植が行われた。そして、進化経済学会が1996年設立された。進化経済学の(3)の支持集団が形成され、これから、パラダイム支持者が養成されるということになる。

問題は、日本は、明治以来、欧米（キリスト教文化圏）から、経済学のパラダイムを移植し、支持集団を養成するという、学問後進国のパターンを脱皮していないことである。何故か。

日本では、経済学のパラダイムを創造した経験はないのは、業績評価、大学制度や能力の問題もあるが、それ以上に学者に始めから routine として、パラダイム解きの優等生で、そのような志を持っていないからであろう。

標準的な学者は、既存のパラダイムの職業的支持集団で、専門家集団の中で、パラダイムの中で未解決の部分解決のために支持集団の学者仲間を相手に研究し、たとえ現実や世間から遊離していたとしても、支持集団内部で通用する、多くの論文や博士論文を書き、他の専門家に認められ、その業績が利用される、そのような活動に従事する。

有能で篤実な数パーセントの学者は、あるパラダイムの一定の支持集団として多くの論文や本を書いて学者生涯を送る。

日本から、古典派経済学（分配理論）、マルクス経済学（社会主義）、歴史派経済学（経済発展論）、新古典派経済学（価格分析）、ケインズ経済学（所得分析）のような経済学の新しいパラダイムを作った経験は明治時代以来ない。近代になってからは、中国もそのような経験はない。森嶋通夫は「1940年前後に関する限り、中国の経済学の水準は、日本のそれより遙かに高かったのではないかと想像される……」（「日本にできることは何か」岩波書店, p. 4）といている。日本でリスクなベンチャー企業が育たないように、経済学者もリスクな独創的な経済学に画期をもたらすようなパラダイム作りに挑戦しないからである。新しいパラダイムにもとづいた経済学の構築をすることが東北アジアの経済学者のこれからの最大の使命であろう。このためには、少数の vi-

sion を持った経済学者の多くの失敗や試行錯誤を経なければならないであろう。

西洋の学統では、アリストテレスが学問の基調をつくり、東洋では、孔子の教えに学問は源を持っている。そして、儒学では、「述べて作らず」であり、官庁記録的学問であり、それとは対蹠的に西洋の学問は論争的学問である。

前者は、地味で視野が狭く保守的で、重箱の角をつつくような仕事が「学問的」であるとししばしばいわれ、大まかな斬新な idea は評価されないが、後者は視野が廣く、論争しながら、斬新な説（玉石混合であるが）をどしどしだしていく。

経済学の歴史を見ると、批判と攻撃、反批判と応戦を繰り返しながら、学問や科学の伝統を重視しながら、新しいパラダイムが形成されていっている。

「自ら学問のパラダイム作りに参加するような、大それたことを手がける自身がない。そこで、まず、研究の習作から始める。落ち穂拾いである。それには、ヨーロッパでできたパラダイムにしたがって、通常科学的研究を進めて行く。それは、二流となりといえども、主流にのった仕事であり、それなりの意義がある。国際的な主流に沿う仕事の方が、あるいはしやすいかもしれない。パラダイムはすでに与えられているのであるから、方法には迷いはない。そして、常に、世界の主流に参加しているという心理的安定を得る上で、ひとかどの学者面ができる研究を出しやすい」（中山茂 [1974] p. 28）。

「創造的条件のないところでは、海のものとも山のものともつかないものには、手を出さない。そして、先進国で提起された問題を一生懸命解く事に精を出す。彼等は文字通りの支持集団であって、パラダイムを出さない。」（中山茂 [1974] p. 285）。

「学問的営為の本命たるパラダイム作りのために、……大海原を泳ぎまわらなければならない。が、専門分化した制度という生け簀の中で保護された研究者群は、大海原を泳ぎまわる力がない。自らを導くパラダイムの無いところに放りだされると、溺れてしまう」（中山茂 [1974] p. 270）。

パラダイム作りは自然科学の世界では、30代に黄金時代が来ると云われている。社会科学では一世代ずれるかもしれない。社会科学では、その後50代60代は新 idea の開発線上の仕事になる。学界での発言権の強いのは、通常科学の奨励者である。

若い研究者がパラダイムを作ろうとすれば、大学院と30代の若い時代は先行者の驥尾に付して通常科学を手際よくこなし、研究者の地位を確立した上で、独自の idea で知的冒険に踏み出そうという、学界処世術が必要であろう。しかし、その時では、通常科学の慣行にドップリ浸かり、革命的 idea は枯渇し、知的冒険に乗り出すのには時すでに遅しである。少数の若い野心のある研究者はこのような経験をしているかもしれない。大学院の時にそのようなことを試みれば、専門化された通常科学の権威者からたちどころに否定され、職業的専門家集団の仲間には入れない。

また、大学院の時代は通常科学のマスターの時期であるから、たとえ、既成のパラダイムに不満が在っても、パラダイム作りの野心を持たず既成のパラダイムのナゾ解きの仕事である博士論文を作成した方が良い。しかし、博士論文は通常科学慣行の深みへの第一歩であり、研究者のその後における研究の枠を固定化してしまう。その枠組から99パーセントの人は一生涯離脱出来無い。落ち穂拾いと「ナゾ」解きばかりやっていると、博士栄えて、学問亡びるということになりかねない。それ故、学問の革命は学問の伝統の内部からでなく、その周辺部にいる学者からおこる。戦後アメリカから J. M. ケインズのような文字通りのパラダイムをつくった経済学者がでな

いのは PhD 制度が原因であろう。

経済学はその対象を特定の文化圏に限定されるにしても、経済学という学問の性格は、超文化圏的で、cosmopolitan である。それ故、経済学者は、好むと好まざるとに関わらず、自己の仕事を、国際的に、特に経済学先進国欧米の世界の中で試練にさらさなければならないであろう。

欧米では、日本の経済学者は、英語の出来る人は学問が出来ず、学問がよく出来る人は、英語が出来ないといわれているそうである。これまで、日本は domestic な学者養成を目的にしていたから、仕方がないにしても、衰退しつつあるとはいえ日本経済の規模は世界的なっているのに、経済学者は国内的であるというのでは、これからは困る。野郎自大を避けるため、専門領域の如何にも関わらず、学問の出来る人はもっと積極的に業績を英語で表現して発表すべきである。

1980年代に入り、日本の 1 人当たり GDP が欧米先進国と比肩しうるほどになり、経済が国際化しつつある時、高等教育も Domestic から International への体制の構造改革をやるべきであった。

Workshop の出席者36名中18名は英米人以外の人で、私を除いて、彼等は、英米人と同じぐらいこの Workshop 英語レベルですくなくとも聞き、話す ability に全く問題ない人々だ。Speaker 7 名中 4 名がオランダ、フランス、デンマークと non-native speaker である。

(2) 「神」と「天」の思想なしに絶対的真理は探究できない

今日では、L. Walras の一般均衡理論は、新古典派経済学のパラダイムになっているが、Walras の『純粋経済学要論』は彼の死後20年経ってやっと評価された。Keyense の『一般理論』もそれほどすんなり欧米の経済学界に受け入れられた訳でない。ただ、彼は、『講和の経済的帰結』で世界的に有名になっていたから、Walras ほど悲劇的でなかった。Walras のような事例は科学の歴史ですこぶる多い。非優等生 Walras は西洋人らしく自己主張したが時代は彼を受け入れなかった。彼は孤独であったと想うが、孤独に耐えることができた要因は何であったのであろうか。彼がキリスト教徒であったら、キリストの神が唯一の拠り所であったのであろうか。

東北アジアのポスト儒教文化圏の学者では、儒教の「天」を拠り所にするかもしれない。（「天」概念については、佐々木毅、金泰昌編 [2002] 溝口雄三発題Ⅱを見よ）。名著『アジア史概説』、『中国史』の著者宮崎一定は、「古語にいう、人盛んなる時天に勝つ、天定まりて人に勝つ、と。そういう天を相手にすることだ。」（アジア史研究第2．1959年）といているが、この場合の「天」も儒教の「天」を指すのであろう。日本の経済学者は何を拠り所に研究しているのであろうか。

我々が、欧米の学界に active に commit としたとしても、Walras のようなことも起こりうることを考慮しなければならない。経済学史に深遠な impact をあたえるような独創的な業績を芽の出た段階で評価することは非常に難しい。

とはいえ、実状からいえば、日本の15パーセント位の経済学者は、専門に応じて、世界の学界に積極的に関与し試練を経た方が良く考える。いずれ、10年もすれば、中国の育ちつつある経済学者が得意の英語を駆使して欧米の学界に参加してくるであろう。東北アジアの学者が世界の学界で活躍するのも案外近いうちに来るかもしれない。日、韓、中、台では、実学思想の儒教が工業化の成功に役立ったが、(1)学歴社会は一種の文明病（R.P. ドーア）とされるが、儒教の世俗化に、過度の学歴信仰を生み、かつての中国の「科挙」のように欠陥を持つ、(2)儒教の実学思想はすぐに役立つことが過度に重視され、science の独創的 spirit が育たない、という欠陥を持つ。

ポスト儒教圏の meme は学問の発展に大きな制約になって来た。

(3) 学問上の伝統の重視：反面教師から学ぶ

Nelson and Winter が Thorstein Bunde Veblen の思想を現代的に再構成し、単に何かを付け加えたというよりそれをよみがえさせそれ以上のものにしたという意味で、自国の経済学の学問伝統を重視しなければならない。しかし、学問上の先進国か後進国かによって、その伝統重視の意味も違って来るであろう。日本は、経済学では、欧米の学界の先端水準を吸収・消化しているという意味で、先進国であり、新しいパラダイム作りの経験がないという意味で、後進国である。¹²⁾ 1919 (大正8) 年東京大学に経済学部ができた。その後、経済学部を持つ大学がすくなく生まれ、戦前の大学は研究の必要性を説きながら、実際は教育中心で、工業社会に官僚、サラリーマン、技術者を送り込むことに終始した (玉野井芳郎『日本の経済学』中公新書、昭和46年)。この意味で、戦前戦後を通じて、日本の大学は教育中心であった。

明治以来、日本の経済学は、古典派経済学、ドイツ歴史学派、マルクス経済学そして近代経済学の順序に移植した。日本の経済学者はいずれの position をとるにせよ、これらの中級程度の知識を持って研究すべきであろう。

(4) アメリカとヨーロッパの経済学をもっとバランスよく摂取すべきである

英国はいうまでもないが、オランダ、イタリア、フランス、デンマーク、なかでもオランダの経済学者はいい仕事をしているように思われた。日本の政治のアメリカ一辺倒を反映して、日本の経済学は第2次大戦前はドイツ経済学への偏重であったように、第2次大戦後はあまりにもアメリカの主流派経済学に偏り過ぎている。欧州の経済学者は、アメリカの主流派経済学者に公然と挑戦しておりと一味も二味も違う。欧州の経済学者から、もっと学問的刺激を受けた方がよいと思う。

注

- 1) Darwin と古典派経済学の関係については、Hodgson [1996] の 4 Political Economy and the Darwin Revolution を見よ。また、英米独の進化経済学の歴史を概観している Hodgson ed., [1998] Introduction は、経済学と生物学の関係を知る上で有益である。
- 2) 上山春平 [1963] pp. 188-194.
- 3) 小野進 [1992, 1995] p. 9.
- 4) 小野進 [1992, 1995] p. 14.
- 5) Workshop の時、左隣に座っていた Oxford 大学の H 氏が、あなたは進化経済学を長い間研究しているのか、と尋ねた。私は進化経済学より制度派経済学に関心がある、と答えたら、彼女は、私もそうだ、開発経済学で PhD をとり、今は文化人類学で fieldwork をやっている、今日は、進化経済学を勉強するつもりでここに来ている、と言った。
- 6) 帰途の飛行機の中で読んだ 7 月 15 日の日本経済新聞朝刊に、R. Aunger の今年出た meme の著作を紹介していた。
- 7) 長谷川真理子・三井信宏・矢原徹一 [1999]『現代によみがえるダーウィン』はこのような兆候を示しているのであろう。
- 8) 今西錦司の棲み分け論のダーウィン批判については、今西錦司 [1976], [1977], [1995] を見よ。

十数年前、京都大学経済学部瀬地山敏氏（進化経済学会会長）から、今絶版になっている森嶋通夫 [1982]『無資源国の経済学』（岩波書店）は、今西錦司の棲み分け理論の適用と解釈できる、と聞いた事が何故か印象に残っている。なぜなら、通常、新古典派経済学者は、フルコスト原則を認めないし、ケインズ派は、新古典派自由市場価格決定論を認めないが、森嶋の本では、新古典派型価格決定論とケインズ型フルコスト原則の価格決定論の複式価格決定論になって棲み分け理論になっているからである。『無資源国の経済学』の英語版 “The Economics of Industrial Society” Cambridge University Press, 1984 は London School of Economics の学部 1 年生対象の ‘Economics’ の講義の教科書であった。現在の多くの日本の大学院修士の学生にとっては難しい本である。

『今西錦司全集』全10巻講談社の著作目録には、英文の単行本はないが、英文の論文業績が19本でている。今西が英国の権威ある雑誌 “Nature” に Darwin 批判の論文を投稿したのかどうかかわからない。“Nature” に投稿されたと見るのが自然であるが、もしそうなら、何故 accept されなかったのか。Referee Report に reject の理由が明示されているはずである。それが公開されたら後進の者にとって非常に有益であるはずである。それとも “Nature” に投稿されなかったのであろうか。

高田保馬は日本経済学史上傑出した経済学者である。高田保馬には、欧文論文29本のうち5本は独文論文であとは英語論文である。英語論文は主に京都大学の Kyoto Economic Review（戦前の日本の経済学界における唯一の英文雑誌）と大阪大学の Osaka Economic Papers に掲載されている。独文では、Die Rolle des Machtfaktors in der Zinstheorie (Zeitschrift für National Ökonomie, Bd. VI, Hft. 5 Dez. 1935) などがある。高田の学者としての独自の説は勢力説であるが、彼の勢力説の体系について本は日本語で書かれているので、欧米の学界での評価はわからない。

Michio Morishima の編集で Yasuma Takata, Power Theory of Economics, 1995, St. Martin's Press が刊行された。森嶋通夫先生に直接その欧米の学術雑誌の書評はどのようなものであったのか聞いてみたが、印象に残る答でなかった。

高田保馬は『経済学原理』（日本評論社、昭和22年）の自序で一方において、「如何なる学説をとるにもせよ、一たび支配的学説の関門を通過せずして経済を論ずるならば、世界の学界は之を本格的な立場と認めないであろう」、他方において「私自身の経済学説、いはば勢力説的経済理論は通説を理解するほど其内容が明確になるのを覚える」と述べているが、価値ある言説である。

富永健一 [1995]『社会学講義』中公新書は、『階級及び第三史観』（1925）、『社会関係の研究』（1926）、『勢力説』（1949）、『民族論』（1941）、『世界社会論』（1947）、どれをとっても独創的なアイデアにみちいてすばらしい。高田の死後20年以上を経たが、彼の理論社会学はまだだれによっても超えられていない」（p. 308）と述べている。

戦後日本の経済学は、とくに森嶋通夫や宇沢弘文の経済学は、その学識の広さと深さ、novelty and creativity の面で高田保馬の経済学を乗り越えたか。なお、安富歩（東京大学）の「創文」1994年 vol. 5, no. 354 において森嶋通夫『新しい一般均衡理論』の書評で、森嶋経済学の全体の構造に関するすぐれた解説が参考になる。

なお、高田保馬の勢力経済学は日本の制度派経済学の原型とみなして差し支えないであろう。

- 9) Alchian にとっては、企業理論は産業についての研究である。現行の経済システムでは、非人格的な市場の力が、プラスの利潤を実現した企業を生き残らせ（survival）、損失を出せば消滅さす。彼によるとビジネスマンが利潤を追求することと、最大限の利潤追求者とは鋭く異なる。不確実性の下では、企業がいろいろな形態の意識的な適応行動（conscious adaptive behaviour）に訴えるのは合理的である。意識的行動の一つの形態は、模倣（imitation）である。フルコスト原則による価格付けのような、企業行動のルールは、模倣によって成功した結果であるかもしれない。模倣は現存の行動パターンに必ずしも一致している必要は無いかもしれない。他の企業の模倣に失敗したら、新しいパターンが出現するかもしれない。模倣は新機軸を導くことが出来る。試行錯誤は Alchian によって言及された環境にたいする意識的な適応行動である。ところで、Hall と Hitch が、1939年商品価格の形成に関してイギリス企業にアンケート調査を実施し、これを理論化して、いわゆるフルコスト

原則を提示した。彼等は、企業家は限界収入を計算することは困難であると指摘した。

これに対して、Lester は、新古典派企業理論が現実的な説明に耐えられるかを調べるため価格決定についてアメリカの企業の会長や社長にアンケート調査を行った。結果は否定的であった。彼の多くの論文の empirical findings は、彼に限界理論の根拠に重大な疑問を持たせた。また、Lester の大量の論文は限界費用を計算するという困難な仕事に向けられたが、この意味で、Lester の研究は Hall と Hitch の仕事を補完する。反限界主義者は企業が価格、産出高、雇用政策を決める時、限界量の立場で考えないという事実をつきつけた。

Machlup と Stigler は Lester に反論した。限界主義者の批判は、Oxford Group に向けられるより、Lester の批判に向けられた。なお、小野進 [1992, 1995] で、簡単なフルコスト原則の系譜を提示しておいた。現代でもフルコスト原則は一つの大きな現実であろう。にもかかわらず、今日のミクロ経済学の教科書では、不思議なことに、フルコスト原則について言及が全くない、あったとしても申し訳程度で、数行の説明もない。数式はあっても事実がない、こうしたことが30年以上もつづいている、一体これはどうしたことか。主流派経済学はあまりにも自己のイデオロギーにといわれすぎている。限界費用論争については塩沢由典「複雑系と進化」(進化経済学会編 [1998] 所収) がいい。

- 10) 「英語で学ぶ経済学」(3 回生以上) という授業を持っているが、T. J. Yeager 著青山繁訳 [2001] 『新制度派経済学入門——制度・移行経済・経済開発——』東洋経済新報社を参考書として推薦したところ、一人の学生から、Old Institutional Economics の教科書を教えて欲しいという質問があった。私はとっさに思い浮かばなかった。次週の授業で調べて伝えたと学生に云った。然し、よく、考えても見ても日本語で無かった。そこで、Geoff に適切な学部学生用の教科書を教えて欲しいと e-mail した。彼は、John R. Searle (1995) The Constitution of Social Reality, Penguin Book と Lauret, John (2001) Darwinism and Evolutionary Economics, Edward Elgar. を教えてくれた。しかし、この二冊は、英語である上に、大学院生のみならず学部学生にもあまりにも程度の高い本だ。哲学を知らない経済学者にも水準の高い本である。
- 11) イギリスにおいて、ケインズ以後の最も偉大な経済学者といわれ、Walras の一般均衡理論を現代風に再構成した、J. R. Hicks も非優等生であったようだ。

マギー [2001] は次のように云っている。「私と同じ PPE 課程を終了したなかで、おそらく学者として最も際だった業績を残した二人の人物も、第二級の学位を与えられた。その二人は、ノーベル経済学賞に輝いたジョン・ヒックスとピーター・ストローソンである」。尚、オックスフォード大学の PPE (Philosophy, Politics, Economics) 課程については、森嶋通夫 [1991] 『政治家の条件』岩波新書を見よ。

英国の大学では、学校により多少異なるかもしれないが、どのような成績——Honours (First class 一学部で十数人位でないか)、Second Class (Upper Division, Lower Division)、Third Class, Pass——で卒業したのか公表される。Hicks は Second Class の学位で卒業した。

何故研究中心の大学と教育中心の大学に分けるのか。ドイツの実存主義哲学者カール・ヤスパース『大学の理念』(1945年)では、根元的知識を探究する意欲をもつのは少数者であるからである。オルテガ・イ・ガセット『大学の使命』(1930年)は、大学の構成は平均的の学生を対象にし、大学は教養教育によって生きた統一体・ヨーロッパの人間を再構成しなければならないといっている。ヨーロッパ社会では、支配的な職業は中産階級によって支配されている。その人達は専門職以外に、その時代の生氣ある影響を社会に及ぼす能力を示すことがきわめて重要である。それ故、大学は時代の所有する理念の体系を教授することが、大学の根本問題になる。

日本も研究中心の30位のエリート大学と50位の産業用の大学と50位の一般教養の教育中心大学に分ける。オランダの大学のように、この30位の大学の間の格差は絶対なくすべきだ(喜多村和之 [2002] 『大学は生れ変わるか』中公新書, p. 29)。このエリート大学出身の秀才は創造的仕事にはむかないから官僚になってもいい、エリート大学の独創性のある非優等生が学者になり細かい形式的な基準の業績評価などいわず、「自由奔放」に研究をさせれば国際的に影響をあたえる独創的な学者が

輩出するかもしれない。

イタリアのフィレンツェ、シエナ、ピサの三大学が共同で国際級の一大学院を創設したように、関学、関大、同志社、立命も一流の英米の大学院に匹敵する連合大学院をつくれればよい。教授団は独創性、学識、教養、英語力のある志の高い人（各大学に5%位はいると信じる）を選抜し、50%位はノブレス・オブリージを持った欧米の一流の学者に当面客員教授に来てもらう。学部は授業料を高くして良質の教養教育に徹する。

勿論、教育中心の大学の教員も研究に従事する人がいるであろう。周辺（研究の）の強みを発揮して、案外、こちらの志の高い人から、新パラダイムの独創的な業績がでてくるかもしれない。何しろ、科学史は、新しいパラダイムは、学問の周辺部分・非主流から起こっていることを教えている。

1953年に発表されたワトソンとクリックによるDNA立体構造の発見は、分子生物学という新しい学問を開く端緒となり、生物学に一大革命をもたらした。1950年代前半DNA研究は学会から無視され、周囲から意味のない研究として中止を勧められるような状況、つまり、厳しい学問的非主流の立場の中で進められた研究成果であった（永田親義 [1997] pp. 140-142）。

柘植俊一 [2000]『反秀才論』（岩波現代文庫）は、日本人は秀才の民族で全ノーベル賞の3分の1をとっているユダヤ人は反秀才の民族であるとして、反秀才（輝ける個性の一タイプで鈍才ではない）を日本はもっと育て、秀才と反秀才のバランスをとるべきだとしている。

西欧では、エリート高等教育の核心について意見が一致しているとして、マーチン・トロウ [1979] はエリート高等教育の基本的特性について次の4点を挙げている（pp. 135-136）。

- ① 知識と技術を伝達し訓練するだけでなく、学生の知性、感性、態度、人格を形成することにエリート高等教育の特性がある。
- ② エリート教育は、教師と学生の緊密で長期にわたる関係を通しておこなわれる。それ故、エリート高等教育には、そうした関係を可能にする環境がつくられ、維持される必要がある。
- ③ 具体的なカリキュラムがどうであれ、エリート高等教育は学生に、自分はこの世界で何か重要な偉大なことをする能力をもっているのだ。重要な発見をし、巨大な組織を動かし、法と政治、さらには学問を左右していく力をもっているのだ、といった自信を持たせる。
- ④ エリート高等教育は学生に多くのことを要求する。

100位の実学と一般教育中心の教育大学は、研究中心の大学に勝るとも劣らず重要である。特に日本の場合、家庭と学校における道德教育の欠落と悪平等主義故に、人材の質が劣化し、人材教育が劣化しているからである。教員と学生の比率は、私立大学ではせめて国公立大学並にすべきだ。官尊民卑をなくすべきだ。私立大学も覇気がなさ過ぎるけれど、イエール大学やプリンストン大学は、研究センターの大学であるが、総学生数1万人強、教員数は3千人を上回る（藪下史郎 [2002]『非対称情報の経済学：スティグリッツと新しい経済学』光文社新書, p. 69）。

アメリカには、大学院を持たず学部学生の教育だけ集中するリベラルアート大学があり、アーマスト、スワートモア、ウィリアムスなど有名である。これらの大学は、教員も研究よりも学部学生の教育に重点を置いており、その教育も少人数中心である。それらの大学の授業料は、研究センターのアイビー・リーグ大学とほぼ同額である。自分の子供に質のよい大学教育を受けさせたいと考える両親は、研究重視の大学よりむしろリベラルアート大学に行かせ、大学院に進学する時は研究重視の大学に行かせる（藪下史郎, 前掲書, p. 54）。

- 12) 「「キャチャアップの時代は終わった」など声高にいいながら、日本の学界ほどキャチャアップに時間を費やして、独自の発展を遂げてこなかったところもないのではあるまいか。既に構築され経済理論を勉強して実際の政策に当てはめるぐらいのことであれば役人で十分であるが、新たな経済理論、論点の発見、それも日本独自のものとなるとそうはいかない。その意味で、今こそ、日本の経済学者には、日本が世界に誇れる理論の構築を目指してもらう必要がある。」（木原誠二 [2002] pp. 101-102）。

参考文献

- 荒川章義 [1999] 『思想史のなかの近代経済学』 中公新書
- Dawkins, Richard [1976] *The Selfish Gene*, Oxford University Press（日高敏隆，岸 由二，羽田節子，垂水雄二訳 [1993年] 『利己的な遺伝子』 紀伊国屋書店）
- 江頭 進 [2002] 『進化経済学のすすめ』 講談社現代新書
- Hanusch, Horst ed., [1988] *Evolutionary Economics: Applications of Schumpeter/s ideas*, New York, Cambridge University Press.
- Harrison, Lawrence E. [1985] *Underdevelopment is a State of Mind: The Latin American Case*, The Center for International Affairs, Harvard University and University Press of America
- 長谷川真理子・三中信宏・矢原徹一 [1999] 『現代によみがえるダーウイン』 文一総合出版
- Hodgson, Geoffrey M. [1996] *Economics and Evolution: Bringing Life Back into Economics*, Ann Arbor, The University of Michigan Press
- Hodgson, Geoffrey M. [2001] *How Economics Forgot History: The Problem of Historical Specificity in Social Sciences*, London and New York, Routledge
- Hodgson, Geoffrey M. ed., [1998] *The Foundations of Evolutionary Economics: 1890-1973, Volume 1*, Cheltenham, and Northampton, Edward Elgar
- Hodgson, Geoffrey M. ed. (European Association of Evolutionary Political Economy) [2002] *A Modern Reader in Institutional and Evolutionary Economics*, Cheltenham and Northampton, Edward Elgar
- 今西錦司編集 [1996] 『ダーウイン』 中央公論社
- 今西錦司 [1976] 『進化とは何か』 講談社学術文庫
- 今西錦司 [1977] 『ダーウイン 土着思想からのレジスタンス』 中公新書
- 今西錦司／吉本隆明 [1995] 『ダーウインを超えて』 中公文庫
- 伊東俊太郎編 [1995] 『日本人の自然観・縄文から現代科学まで』 河出書房新社
- 川勝平太 [1993] 「社会科学の脱領域」（山之内靖他7名編） [1993] 『ゆらぎのなかの社会科学』 岩波書店所収）
- 木原誠二 [2002] 『英国大蔵省から見た日本』 文春新書
- Magee, B [1997] *Confessions of a Philosopher*（須田朗監訳 [2001] 『哲人上・下』 NHK 出版）
- 永田親義 [1997] 『独創を阻むもの：哲学不在と没個性』 地人書館
- Nelson, R. R. & S. G. Winter [1999] *An Evolutionary Theory of Economic Change*, Massachusetts and London, The Belknap Press of Harvard University Press
- ネトル, S. K. 桜井邦朋 [1999] 『独創が生まれない日本の知的風土と科学』 地人書館
- 中山 茂 [1974] 『歴史としての学問』 中央公論社
- 小野 進 [1992, 1995] 『近代経済学原理』 東洋経済新報社
- 佐々木 毅・金 泰昌編 [2002] 『公と私の思想史』 東京大学出版会
- 進化経済学会編 [1998] 『進化経済学とは何か』 有斐閣
- 高山 博 [1998] 『ハード・アカデミズムの時代』 講談社
- 富永健一 [1993] 「戦後日本の社会学におけるパラダイム相克とその終焉」（山之内靖他7名編所収）
- トロウ, M. A. 天野郁夫, 喜多村和之訳 [1979] 『高学歴社会の大学 エリートからマスへ』 東京大学出版会
- 上山春平 [1963] 『弁証法の系譜—マルクス主義とプラグマティズム—』 未来社
- Yeager, Timothy J. [1999] *Institutions, Transition Economies, and Economic Development*, Westview Press

The first version : 2002年8月1日

The revised version : 2002年9月18日

The re-revised version : 2002年11月13日

The final version : 2002年12月11日